東海支部報

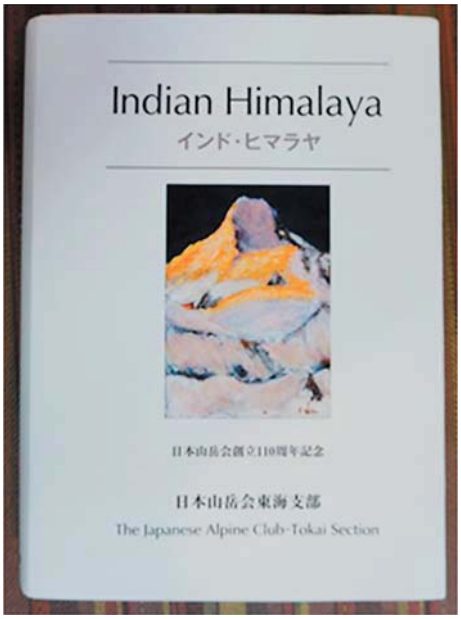
日本山岳会東海支部

No. 144　Jan.　1. 2016

発行　公益社団法人
日本山岳会東海支部

〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8 OMCﾋﾞﾙ
電話：052-332-8363　FAX：052-322-7924
郵便口座 00800-5-13749「日本山岳会東海支部」
銀行口座 三菱東京UFJ銀行 覚王山支店
普通1222073「日本山岳会東海支部」

編集　星　一男
印刷　㈱ 浅井隆文社



スピティ北部・ウムドン・カンリ初登頂（1999年）

The First Ascent of Umdoung Kangri（6643m）
JAC東海支部（JAC-TOKAI Section）

クーラ峰頂上から、はるか南に連なるスピティ北部の山々が見渡せた。鋭鋒ギャから西に目を移すと、ひときわ高い雪の双耳峰が目に入った。しかし、インナーライン内であること、情報が無いことなどと中高年隊の目標としてはかなり重く感じたが、次の目標にと心に決めた。

問題の登山許可は、1998年に訪印し、内務省のＸビザ担当者から内諾を得ることが出来たので、IMFにキャンプ・サイトのウムドンから取ったウムドン・カンリ峰名で仮申請し、偵察隊でキャラバンルートの偵察を行った後報告を分析し、翌年の計画が進められた。そして、数々の高所登山経験を持つ増井が、先遣隊としてルート工作に当たることとなった。　（鈴木豊夫）

増井は一足先にデリーを出発。マナリ、カザを経由して標高5580mのバラン・ラを越えパラン氷河を下って、カルサ・ゴンマに着いた。デリーから12日目であった。ここまで快晴の日もまじえて天気もまあまあであった。パレ・チュ川を下って、7月29日キャンプ・サイトのウムドンに着きBC（4600m）を設営した。このころから悪天気の周期に入ってしまい、雨が降ったり止んだりの中を偵察し、西稜からのルート開拓を決めた。

もろい岩場に少しずつ高度を上げ、岩壁中の岩棚に8月2日にC1（5370m）設営。やっと天気が落ち着いてきた5日もろい岩壁を登って西稜上にC2（5750m）を設営した。ダージリン・シェルパ達も良く働いてくれて、C2までのルートが開けた。この日夜遅く、雪のバラン・ラ越えに苦労した本隊の5名がBCに到着した。

Umdoung Kangri（6643m）（T.Suzuki）

366

Umdung Kangri Area

6日、霧の朝、増井行照、増井えみ子、柳原がC2から頂上を目指した。ホワイトアウトの中、広い雪原を越え西稜に立ったがここで引き返した。
（増井行照）

第１次隊初登頂

8月8日キャラバン開始して初めての快晴。先遣隊の苦闘で開いたルートを使い、水野、青戸と若手のシェルパ2名は、C2から一旦西峰とのコルへ下り、時には傾斜を増す雪稜にラッセルを繰り返し、登り続けて無風、快晴の中、13時26分初登頂に成功した。頂上からは大パノラマが広がり、東南にはスピティの最高峰のギャ（6794m）が孤高の高さでそびえている。西南には6300級の無名峰3座を見下ろし、至福の時を過ごした。先遣隊が西稜北面の岩壁にルートを開いてくれたことが初登頂に結びついた。山口、田村は西峰で引き返した。

第２次隊登頂

8月9日、早朝から雪で視界もきかなかったが、しばらくすると回復の兆しが見えてきたため、増井はシェルパ1名と出発。11時55分登頂した。

直ちに待機させていた馬で帰路のキャラバンを組み、8月15日、先着して

367

表紙画：ナンダコート　杉田 博氏 画（支部員）
装丁：小泉 弘氏（JAC 会員）
編集：日本山岳会東海支部

本文 8 頁詳細

日本山岳会創立110周年記念出版『インド・ヒマラヤ』

目　次

○年頭のご挨拶　小川　務　2
○2016ワディントン山群登山計画　山田利行　3
○2016アコンカグア登山計画　高橋玲司　4
○ゴザフェス2015　坂部信一郎　4
○名古屋山岳会80周年記念祝賀会開催　星　一男　5
○2015秋二つのボランティア登山　前田隆久　6
○第7回森の音楽祭2015　毛利邦男　7
○新刊紹介ー『インド・ヒマラヤ』　沖　允人　8
○新企画ー東海岳人列伝（1）　西山秀夫　9
○新委員会創設　山田明美　11
○同好会コーナー　山中光子　11
○リレーエッセイ⑥　尾上　昇　12
○東海支部の蔵書からの一冊⑥　石田文男　14
○支部友コーナー　酒井　広　16
○Alpine express in the Canadian Rockies　山田利行　17
○委員会報告　登山教室　天野俶明　19
○会務報告　毛利邦男　20
○ルーム日誌・会員異動　酒井　広　21
○INFORMATION　23
○編集後記　星　一男

http://www. jac-tokai. jp　E-mail room01@jac-tokai.jp　E-mail room01@muse.ocn. ne. jp

年　頭　の　ご　挨　拶

支　部　長　　小川　務

新年明けましておめでとうございます。

昨年は内外共に厳しい出来事が相次ぎました。４月25日、ネパールの首都カトマンズ北西77km付近を震源とするマグニチュード7.8の地震があり、8,500人を超える犠牲者がでました。特に登山者になじみの深いガネッシュヒマールやランタン谷で大きな被害が出たようです。さらに、10月26日、アフガニスタン北部を震源とするマグニチュード7.5の地震があり、隣国のパキスタンを合わせ370人を超える死者が確認されました。支部にはウルタルⅡ峰で知られているフンザなどでも、大きな雪崩が発生したようです。双方の被害に遭われた方々に心からお悔やみ申し上げます。

一方、国内の東海支部関連では昨年1月17日、五竜遠見尾根でバックカントリースキー中の池田支部員を含む3名の早稲田大山岳部OBグループが遭難しました。支部からは山田副支部長、高橋副支部長、野呂遭対委員長らを中心に捜索を行い、6月13日に1人、6月17日に2人が収容され、捜索活動を終了しました。

さらに、4月12日、福井県荒島岳の荒島谷川において、大島支部員が滑落事故により死亡されました。事故の経過と原因等の分析結果は、支部報142及び143号に報告されています。大島さんのご冥福を心からお祈りし、今後同様な遭難事故を防ぐため「技術向上委員会」を新設し、当面、以下の講習会や現地研修を実施し、山行リーダーと若年層のレベルアップ及び遭難防止に取り組みます。

①　レスキュー技術講習会
②　岩登り技術講習会
③　雪山を目指す指導員は雪上技術講習会

幸いにして、昨年11月に元東海支部員で本部や「文登研」で指導員をされ、ヒマラヤの高峰登山の経験も豊かな、片岡泰彦会員が東海支部に戻り「技術向上委員会」の委員長を引き受けていただけることになりました。

東海支部はここ数年間「会員の増強」と「若年層の確保による若返り化」に取り組んできました。その結果、支部員数は354人、支部友54人、東海学生山岳連盟約100人、猿投の森づくりの会約100人を有する組織となりました。

また、40歳までの入会金を支部が補填するなど、入会促進につとめた結果、昨年は20数人の若年層の入会が実現しました。

以下にますます活発な各委員会事業の一端を紹介します。4月25～26日にボランティア委員会の「知的障がい者支援登山」が三重県菰野町朝明茶屋で、5月10日には東濃の屏風山で「視覚障がい者支援・春のブラインド登山」が開催され、ともに、多くの支部員と学生部メンバーが参加しました。

6月20～21日に「第3回夏山フェスタ」が名古屋駅前ウィンク愛知にて開催され、8,000m峰14座の完登者である竹内洋岳氏のトークショーや89小間もの展示出店を得て、盛大に開催され、参加者の総数は、6,930人を数えました。

秋晴れに恵まれた10月24日には「第7回森の音楽祭」が「猿投の森」で開催され、65人の東海学園交響楽団によりベートーベンの交響曲第7番が演奏されました。演奏後は、森の観察会やハイキング、リースづくりなどもあり、参加者数はこれまでで最多の532人を数えました。

また、2015年はカナダ在住の山田利行君らによってマウントケフレン東壁及びテンプル北壁での登攀とストームマウンテン北西壁での新ルートの開拓がされております。さらに2016年5～6月にはワディントン山群での未登の岩壁登攀と縦走が計画されています。皆様の温かいご支援をいただけますようお願いします。

最後に、皆々様のご活躍により、東海支部が益々発展することを祈念申し上げまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

2016 ワディントン山群登山計画

山田利行

マウント・ワディントン　メインピーク 北西ピークより

マウント・ワディントン(4019m)南壁※Googleより転用

今回、私達は1か月という期間をその地で過ごし、春季ワディントン山群の登山の可能性の調査と南面及び北面において未踏のラインの登攀とワディントン山群の縦走をしたいと考えている。カナダ在住の日本人である私達がカナダのこの山域を開拓することは日本の登山界だけではなくカナダの登山界においても大変意義のあるものだと考えている。

隊の概要

1. 隊の名称

日本山岳会東海支部ワディントン山群登山隊2016

2. 山域

カナダ・コーストマウンテン・ワディントン山群

3. 目的

ワディントン山群における春季登山の可能性の調査、南面及び北面の未踏のラインの登攀とワディントン山群の縦走計画。

カナダはバンクーバーの北西約280km地点に存在する巨大な氷河を抱いたワディントン山群。夏の時期には北米のクライマー達が訪れる場所ではあるが、日本人がその山域に入った記録はほとんど見受けられない。また、春の時期となると年に数パーディーが入るか入らないかというのが現状である。

そのようなアラスカ以上の辺境の地には山群の主峰であるワディントン(4019m)をはじめ、4000m級の切り立った壁を持つ山々が存在している。

4. 隊員

山田利行(30)　隊長
登攀計画、装備、現地準備
※カナダ・カルガリー在住
東海支部員

谷　剛士(35)
現地交渉、登攀計画、現地準備
※カナダ・カルガリー在住

菊池　徳(26)
装備、食料、日本準備と日本連絡係
※東海支部員

5. 日程

5月初旬　バンクーバー集合

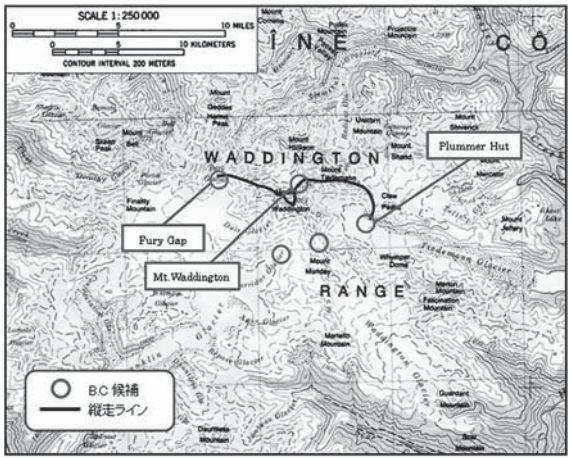
5月初旬　バンクーバーで食料調達後、車で移動
　バンクーバー～ウィリアムズレイク～タトラレイク～ブラフレイク(800km、10時間)。
　ブラフレイクからセスナでワディントン山群上の氷河へ移動。

5月初旬～6月初旬　ワディントン山群にて登攀を行う。

6月初旬　ワディントン山群から往路を戻り、バンクーバーにて解散。

⬆ バングーバーからワディントン山群への道程

ワディントン山群エリアマップ ➡



2016 アコンカグア登山計画

東海学生山岳連盟　**高橋玲司**

概要　昨年頃より東海学生連盟内に海外登山への思いを持つ学生が集まり、本登山計画に至った。集まったメンバーそれぞれの登山経験や能力は大きく異なるが、各メンバー同士が各自のもつ能力を活かし、補いあえる様なチームワークを育み、全員登頂を最大の目標として海外登山に挑む。南米大陸最高峰として知られるアコンカグア(Aconcagua, 6962m, アルゼンチン)への登頂を目指す。現地でのコミュニケーションを通してその土地の文化・風習に触れ、知見を広げる。

期間　2016年2月19日～3月18日(予定)

隊員　総隊長(日本総本部)　高橋玲司
　日本山岳会東海支部　副支部長
　隊長(現地総括)　小澤佑介
　名古屋工業大学4年
　事務局(連絡/会計)　杉本　晴
　南山大学4年
　記録(映像/写真)　秋田卓哉
　名古屋大学4年
　医療(現地指揮)　伊藤さやか
　三重大学2年

概要説明　この山を今回の海外登山の対象として選んだ理由は、以下の点が挙げられる。

・海外高所登山の経験をするには、環境が整っており比較的取っ付きやすい。
・現地レンジャーおよび医療スタッフによる登山者の保護環境が整備されている。

プエンテ・デル・インカのレンジャーステーションより入山、オルコネス谷を経てベースキャンプとなるプラサ・デ・ムーラスへ。更に上図C1～C3の往復や荷揚げによる高所順応を行ないながら高度を上げ、ベルリンC3より山頂へ最終アタックをかける。

宿泊地は以下の5地点

コンフルエンシア(3395m)、プラサ・デ・ムーラスBC(4230m)、プラサ・カナダC1(4900m)ニド・デ・コンドレスC2(5350m)、ベルリンC3(5950m)

これらを往復しながら高所に順応してゆく。

ゴザフェス(GOZAISHO FESTIVAL) 2015

南山大学アルパインクラブ　**坂部信一郎**

「全国の若き岳人よ、御在所に集え！」

今年度も9月26.27日の土日で御在所フェスティバル、通称「ゴザフェス」が開催されました。今年で６回目の開催となるゴザフェスは東海学生山岳連盟主催のイベントで、全国の山をこよなく愛する学生が鈴鹿山脈.御在所山に集い、交流しようという催しです。

二日間にわたる行程で、初日は体験クライミングを行いました。中には初めてロープを結ぶという者もいました。しかし藤内壁には簡単なルートから難しいルートまでたくさんあります。みんなでそれぞれのルートを楽しめたのではないかと思います。今回の体験クライミングをきっかけにクライミングに、よ

今年のゴザフェス　御在所山頂上に全員集合

り興味を持つ人がでてきたら嬉しいです。僕も二年前のゴザフェスをきっかけにクライミングにのめり込むようになったのです。

その後藤内小屋で懇親会を行いました。各大学がそれぞれ一発芸を披露し大いに盛り上がりました。初めて会った方もいましたが山という同じ世代の共通の趣味を持つ人たちと語り合うことでみんなの距離が縮まりました。

二日目はクライミング、トレッキング班に分かれて、それぞれ御在所山山頂を目指しました。それぞれコースの難易度は異なりますが、みんなで同じ御在所山という山を無事登りきることができました。

ゴザフェスは毎年この時期に開催されています。全国の若き岳人の皆さん、御在所に集まり飲んで話して登りましょう！

参加大学：南山大学、名古屋工業大学、名古屋大学、名古屋外国大学、岐阜大学、岐阜医療科学大学、岐阜聖徳大学、愛知学院大学、三重大学、大同大学、東海大学、日本大学、大阪大学、龍谷大学(計14大学、総勢42人が集結)

名古屋山岳会８０周年記念祝賀会開催

支部報編集委員会　**星　一男**

去る10月25日(日)に名古屋・上前津のローズコートホテルで名古屋山岳会の80周年記念祝賀会が行われ、約80名の参加があった。名古屋山岳会は当支部の団体会員であり、大口評議員・中世古評議員・鈴木美代さんをはじめ個人会員としても当支部で活躍されている会員も多い。

第1部は小川義夫会長の挨拶から始まり、当支部の小川支部長をはじめ中平等新一愛知県山岳連盟顧問、山岳会/グループ・ド・モレーヌ　田中宣紀氏の祝辞が述べられた。祝賀会は10のテーブルに会員が分れて、小川正育会員の乾杯の音頭で始まった。

その後2つの講演が行われた。景山 淳会員による「パミール・シルクロード探検隊2015」と田中悠太会員による「レーニン峰敗退、そして挑戦」と題して、自身初の遠征報告があった。

第2部は80周年に向けた会員諸氏へのインタビューが行われ、参加者は会の遠征や登山歴など思い出に浸っていた。東海支部の遠征にも関係が深く、1997年に行ったK2学術登山隊、青年部カナディアンロッキー登山隊、インドヒマラヤ登山隊など多くの遠征に参加された会員方も多い。

最後は恒例の与呉日出夫氏による記念写真

小川名古屋山岳会会長の挨拶

の撮影と、若手現役代表の吉村 賢氏の謝辞があり、万歳三唱で終了した。記念品として名古屋山岳会80年史などが配られ散会となった。

東海地区の登山界を代表する歴史ある会として、今後も若手の育成や海外遠征に挑戦する伝統を受け継いでいってほしい。

田中悠太会員の記念講演からレーニン峰

2015年、秋の二つのボランティア登山事業報告

―たくさんの笑顔とありがとうに出会えます―

ボランティア委員会委員長　**前田隆久**

11月3日(祝)、秋の視覚障がい者支援登山(ブラインド登山)が開催されました。参加された方からの感想メールは、みなさん晴れやかでした。私見ですが、ボランティア登山は「誰かのために行う登山」ではなく、自分自身にとっても新鮮な体験ができ、何かを感じ取る事ができる登山だと思います。山に登る理由の一つに困難を克服する達成感があるとすれば、サポートした人たちと共に分かち合う登頂の喜びは、たとえ山は低くても別の意味の大きな達成感があります。とは言っても、ボランティア委員会メンバーも、いつもボランティア登山を行っているわけではなく自分たちの山に出かけています。ただ、年に数回かもしれませんが、多様な登山のあり方の一つとしてボランティア登山を企画し、多くの方に呼び掛け、参加していただいて山行を重ねてきました。たくさんの笑顔と、ありがとうを励みにして。

親と子のふれあい登山教室2015

親と子のふれあい登山教室のみなさん

今年も2回に分け、恒例の鈴鹿山系・尾高山で行われた。第1回は10月17日(土)、第二自由が丘幼稚園、第三自由が丘幼稚園の親子50組100名を対象に、幼稚園スタッフ10名、東海支部13名の総勢123名で開催。第2回は10月31日(土)自由ヶ丘幼稚園を対象に、親子44組88名、幼稚園スタッフ8名、東海支部14名の総勢110名で開催。両日とも天気に恵まれ、昼食の芝生広場では委員会から全員に温かいコーンスープの提供もあった。終礼での園児たちの「山は楽しかった。また、来たい」の一言が継続の力となっている。これをきっかけに親子で山を楽しんでくれる方が、増えることを期待している。

秋のブラインド登山

ブラインド登山のみなさん

11月3日(祝)、美濃・釜ヶ谷山(636m)を対象に、伊自良湖駐車場からの周回コースで、視覚障がい者11名、東海支部員28名、他山岳会3名、障がい者の付添い3名、山梨支部から1名の総勢46名で開催され無事終了した。今回で13回目を数え毎回支援者も増えている。こちらも晴天にも恵まれ、頂上では豚汁がふるまわれたりして、満足度の高い山行でもあった。

2015年の行事は、春の知的発達障がい者支援登山、春のブラインド登山、そして秋の2つの行事と全て天気に恵まれ、支援者の皆様のご協力で、事故もなく無事終了しました。2016年は一つ行事が増え、2月6日～7日に、六つ星山の会（視覚障がい者80名を含む、総勢230名を超す視覚障がい者支援登山の会）と合同で、初めての冬のブラインド登山を、ひるがみ温泉泊で計画しています。こちらは、募集人員に制限がありますが、興味のある方は前田までご連絡ください。

本年も、支援登山以外に、委員会と支援者の皆様との親睦を図る山行を含めていくつか事業を計画しております。ボランティア委員会活動への皆さまの、ご理解とご協力よろしくお願いします。

第７回森の音楽祭２０１５

森の音楽祭実行委員会　毛利邦男

去る10月24日(土)に第7回森の音楽祭2015を開催した。今回は国民の祝日『山の日』が制定されたことを受け、「山の日」制定を記念する音楽会と頭に付した。午後の第二部のプログラムには「猿投山山頂をめざしたハイキング」と「クリスマスリース作り」を新たに加えた。ハイキングについては定員を50人として募集を始めた所、またたく間に定員に達するという事態となった。ハイキング担当を引き受けて頂いた登山教室に、予想される大幅な定員オーバーの参加申込への対応を相談したところ、当初予定していた3コースから4コースに増やすと同時に各コースに配置する支援スタッフを増やせば100人超まで対応可能との心強いご返事。ついては支部友委員会の山行リーダーにも応援を頼み、必要な支援スタッフの人員確保につとめた。支援スタッフの方々には、事前のコース確認の下見山行もして頂き、万全を期した。自然観察会は例年通り猿投の森づくりの会の皆さんに説明役及び補助員の役を担っていただき、支部員が誘導員として加わり、10班合計30名のスタッフで対応することとした。クリスマスリース作りは定員50名を少しオーバーする申し込みがあり、これも全員受け入れることで対応した。

今年の森の音楽祭は有料参加者380名にアルプホルン奏者、オーケストラの楽団員、東海支部員、猿投の森づくりの会の支援スタッフなどを加え総勢530人超の音楽祭となった。

和田豊司猿投の森づくりの会代表の挨拶の後、東海支部の村中氏率いる名古屋アルプホルンの皆さんによる演奏を楽しんで頂いた。

名古屋アルプホルン恒例の開会演奏

森に響く東海学園交響楽団の演奏

続いて小川務支部長、梶谷緑化推進機構専務理事、伊藤瀬戸市長から挨拶を頂いた。その後、東海学園の西村先生より本日の演奏曲「ベートーベン作曲交響曲第7番イ長調　作品92」の説明並びに楽団員の紹介のあと、東海学園交響楽団の演奏が始まった。鳥のさえずり、小川のせせらぎ、ふりそそぐ風に奏でる木の葉の音の中、オーケストラの美しい音色に聴衆はうっとりと耳を傾けた。オーケストラの演奏を楽しんだ後、参加者全員で「雪山讃歌」を合唱し音楽祭の第一部を終了した。

第二部は午後12時30分、ハイキングコースで一般参加者77名＋支援スタッフ20名が4班に分かれての出発で幕開けとなった。続いて自然観察会135名＋支援スタッフ30名が10班に分かれて出発、クリスマスリース作りは参加者47名＋支援スタッフ5名がオーケストラ演奏会場に集まり、思い思いのリース作りを始めた。

午後3時30分には全プログラムを終了し音楽祭は成功裏のうちに閉幕となった。

音楽祭に参加して頂いた方には、素晴らし音楽と自然とのふれあいを存分に楽しんで頂けたものと信じている。参加した方に実施したアンケートでもほぼ全員の方から‘音楽祭を存分に楽しんだ’旨の感想を頂き、準備の苦労が報われたと喜んでいるところである。観察会のコース整備、オーケストラ会場並びに道路整備のため3回にわたって行った事前作業に参加して頂いた、猿投の森づくりの会の皆様および東海支部の支援スタッフの皆様のご尽力・協力に対し、この場を借りて改めてお礼を申し上げる次第である。

日本山岳会創立 110 周年記念出版

『インド・ヒマラヤ』

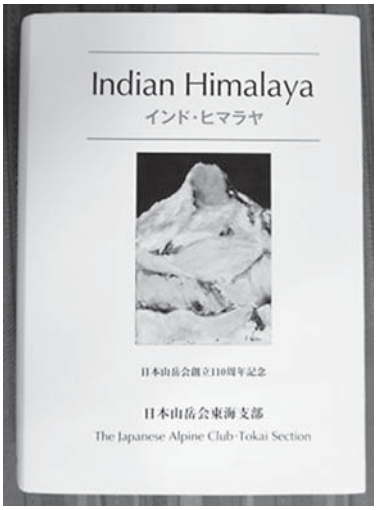
インド・ヒマラヤ出版委員長　沖　允人

日本山岳会東海支部が中心となり、日本とインドを代表するヒマラヤニスト約30名が総力をあげ、1年余りかけて執筆・編集した日本で初めてのインド・ヒマラヤの本格的総括書である。東部カラコルムからアッサムまで、中間にネパール・ヒマラヤを挟み、東西約1000kmに広がるインド・ヒマラヤ全域を13の山域、東部カラコルム・カシミール・キシュトワール・ザンスカール・ラダック・パンゴン山脈・ルプシュ・ヒマチャール・スピティ・キンナウル・ガルワール・シッキム・アッサムとアルナーチャルに大別し、各山域の地勢・歴史・自然・民族などを含み概説。さらに、エリア別に細分し、未踏峰も含めた624座を(位置と山容)(登山史)(文献)によって解説し、最近の登山記録・入山事情も記述した。各山域には34葉の概念図と48頁のカラー・グラビア写真を入れ、本文中にも多数の概念図と写真を挿入した。また、日本人による歴史的な、世界に誇る得る登山、山に挑んだ隊員による活き活きとした記録を含めた。

1970-1990年代にかけてのインド・ヒマラヤに向かう日本隊は、HAJの活動が引き金となって年間数隊を越えるほどの活況を呈していた。東部ヒマラヤの未踏の峰々であったリモⅠ峰(7,385m・尾形好雄隊長)、マモストンⅠ峰(7,526m・尾形好雄隊長)、サセール・カンリⅡ峰(7,518m・沖 允人隊長)、パドマナブ(7,030m・坂井弘志隊長)が日本とインドの合同隊によって初登頂されたのもこの頃である。

1936年に立教大学隊(堀田弥一隊長)が日本最初のヒマラヤ登山隊としてナンダ・コート(6,861m)に向かい、見事初登頂した。これらの登山記録も含め、日本人の48隊、インド人の4隊の登山記録も載せた。ナンダ・コート初登頂以来インド・ヒマラヤに登山した日本隊は2004年までで7,000m峰約16座・70隊、6,000m峰約103座・270隊である(『神々の座・6000m、7000m峰挑戦の記録』HAJ・山森欣一)。これらのインド・ヒマラヤでの輝かしい日本人デビューの幕明けを果たした当時の人々が健在なうちに、記録をまとめておきたいという願いもあった。

それらに、随想「マナリで暮らして20年」(森田千里)・総括論文「インド・ヒマラヤの自然、社会、歴史」(鹿野勝彦)も加えられている。(文中敬称略)。



概要・A5判、1段横組、658頁、上製、カバー装、表紙画・杉田 博、装丁・小泉 弘、発行・日本山岳会、編集・日本山岳会東海支部、印刷・製本・浅井隆文社(名古屋)、発売元・ナカニシヤ出版(京都)、発行部数・1000部、頒価・6000円・発行日・2015年12月中旬。内容見本の請求と予約申し込みは下記に問い合わせのこと。
ナカニシヤ出版・〒606-8161　京都市左京区一乗寺木ノ本町15
電話・075-723-0111:ファックス・075-723-0095:E-mail・iihon-ippai@nakanishiya.co.jp

主な執筆者(五十音順、敬称・職名略)
天野和明・安藤忠夫・石原俊洋・稲田定重・今井正史・岩崎 洋・牛窪光政・遠藤雄悦・大内倫文・大滝憲司郎・尾形好雄・沖 允人・鬼木包重・鹿野勝彦・粂川 章・阪本公一・坂井広志・鈴木常夫・高橋守男・武石浩明・(故)竹中 昇・谷口けい・寺沢玲子・Devynish Muni・Debabrata Mukherjee・能久静夫・能勢真人・芳賀正志・芳賀成明・Harish Kapadia・星 一男・村上泰賢・山森欣一・(故) 吉田周平

最後に、1月16日の支部新年会の場で、出版記念の報告と頒布を予定している。

新企画・東海岳人列伝(1)
～未知の大杉谷を溯った岳人達～

編集委員会　西山秀夫

まえおき

列伝とは「個々の人物、特に国に仕えた官僚の一生を記したもの。また周辺の異民族の風習などを書き並べたものもこう呼んだ。本来は「列侯(爵位を持った家臣)の伝」という意味でこの名称となった。以下略」の意味。

この意味では東海岳人列伝とは内容が漠然として把握し難い。東海地方、岳人であることのくくりはあるが、個々の人物は関連付けるのか。そこで資料の収集も徹底できないこともあり、断片的であっても書き始めることにしたい。

岳人とは昭和22年に京都大学医学部学生の伊藤洋平(1923～85、後の愛知県ガンセンターウイルス部の初代部長、東海支部副支部長)らが創刊した山岳雑誌の名称として考えられた新しい概念の造語である。富裕層主体の登山家よりは職業を持ちながら登山を愛する人という意味の広い概念を持たせたい。本稿では古い時代のことゆえに道草を食いながら列伝の人物たちがどんな時代に生きたかも知りながら進める。

未知の秘境・大杉谷を探った大西と大北会員

『山岳』総索引の「山岳」第2年3号(明治40年11月)の新入会員欄に40名のうちの1名として大西源一(三重県)の名前を見出す。同期のなかで知るのは歌人の与謝野寛(東京市)のみだが、同姓同名かも知れない。与謝野鉄幹は号である。明治40年7月から8月にかけて阿蘇山に登っている。阿蘇登山のあとで入会したことになる。

黒けぶりに真直に揚り
　　そのもとにとどろと鳴りぬ大阿蘇の山
　　与謝野鉄幹

「山岳」第5年1号(明治42年11月)の新入会員35名の中に大北聡彦(東京府)の名前を見出す。同期の人物で筆者が知るのは歌人の平福百穂、登山家の百瀬慎太郎、黒部渓谷で知られる冠松次郎、南日重治の名前も見える。

大北は明治43年発行の「山岳」第5年3号には死去の欄に名前がある。大杉谷の遡行を成功してすぐに死去したのである。

余談だが、南日は田部家に養子に行った後の田部重治である。検索すると「富山県出身。旧姓は南日(なんにち)。田部家に養子。南日恒太郎、田部隆次の二人の兄は英文学者。四高から東京帝国大英文科に進み1908(M41)卒業。中央大、国学院大に進み、東洋大、法政大などで教授を歴任した。「中世欧州文学史」「ペイター」などを刊行するなど学者として活躍した。

同時に、立山山麓で生まれ育ったこともあり、四高時代に林並木教授の影響を受けて登山に関心を抱き、更に大学時代に木暮理太郎(22-1-44-21)を知って山に親しみ始め、北アルプス、奥秩父など多くの山々を登り登山家として活動。 毛勝岳の初登山や秩父における足跡は貴重。1919(T8)「日本アルプスと秩父巡礼」を出版。はじめ南日重治の名前で紀行文を発表。昭和に入ってからも多くの登山紀行を著した。

著書に「山と渓谷」(1929)、「峠と高原」(1931)、「中世欧州文学史」(1933)、「若き日の山旅」(1956)。その静観的登山は後代に大きな影響を与えた。1950(S25)日本山岳名誉会員に推された。晩年になって1965に自伝「わが山旅五十年」を刊行した。」明治42年6月発行の「山岳」第4年の2号には飛騨山岳会が団体で入会の記録がある。飛騨山岳会は明治41年に設立。すぐに入会したわけだ。

さて、日本の近代登山史の黎明期の話である。大北聡彦が「山岳」第7年3号に「宮川水源泝(溯)行大臺(台)ヶ原山登山記」に発表したのは大正元年のことだった。導入部のみ引用する。「大台ケ原は我県下で第一の高山であるが標高は僅か七千尺足らずである、高山としての価値はないが深山としては相当の位置に座るであろう。

こわや恐ろしや大台ケ原は
　　奥にや蛇も棲む鹿もすむ

と唱えられてゐる大台ケ原山から水源を発する宮川上流大杉谷は八百八瀑と称えられている。果たして八百八瀑あるかどうかは知らぬが、此春其本流を溯行して三十有余の瀑布

に逢い、十余の絶壁を踰(越)へ、三度綱を使用して登降した。全く大杉谷の奥は瀑布と断崖との連続であると言っても敢て過言ではあるまい。大台ケ原の記事は、既に山岳第二年第二号に白井光太郎氏に依って書かれてあるが、氏の登られたのは、今から十七年も以前大和国からである、其当時とは山頂も余程文明が侵入している、余は伊勢から大部分は宮川上流を溯って山頂に達したのであるから氏の記載あるにも係らず重ねて之を書く事とした。此山の地図に関しては農商務省二十万分の一地形図のみでは詳しく知ることが出来ぬから、御料林局の地図を参考として、実地踏査の上から杜撰ながらも地図を挿入することとした。伊勢方面は比較的謬も少なかろうと思ふが其他の方面に至っては殊に杜撰を免れぬから諸君の御訂正を得れば幸甚の至りである。」以下は紀行文に入る。

シシ淵

遡行は明治45(1912)年5月。大西源一は櫛田川河口に近い多気町弟国の出身。大北聡彦は松阪市。桃の木小屋は昭和15年完成というから、鍋、米、味噌を携えて、焚き火を起こし炊飯する野営の旅だった。案内人として地元の精通者を伴っての遡行であった。1913年になって、大日本帝国陸地測量部が五万分の一地形図「大台ヶ原山」図幅を出版している。つまり、大西らは精細な陸地測量部の地形図も知らなかった。日本初の登山道具店は大正13(1924)年の開業、登山道具も輸入する時代であった。引用文の綱というのは麻綱のことだろう。沢登りでは懸垂下降を余儀なくされる。必携のナイロンザイル、ハーネス、下降器など戦後まで待たねばならず、原始的登山を余儀なくされた時代の探検的な山旅である。

七ッ釜滝

東海支部俳壇

西山秀夫

十月三十一日～十一月一日の支部山行にて

水戸天狗党の越えた歴史ある
　這帽子峠に着く
初雪の白山見へし峠かな

朝日浴ぶ装ふ山のまだらなり

天然の真珠のごと実むらさき

国境の稜線はみな黄落す

歴史ある雑木黄葉の道ありく

アサギマダラが越えて行った
秋蝶は越の国から美濃へ越ゆ

市川、稲葉さんらせっせと枯木
　を集める
代わる代わる焚き火の世話や
長き夜

根尾谷の猿も焚き火を
恋しかろ

山猿の咆哮を聞く秋の夕

妻恋の鹿の声聞く闇の夜に

新委員会創設

東海支部副支部長　**山田明美**

設立主旨

今年発生した支部員の事故は、支部登山活動の根底を揺るがせ、震撼させた。省みると登山技術もさることながら安全登山への意識レベルが著しく低い事が露呈し痛感させられ、これからの登山活動に危機感を抱くに至った。この状況から脱すべく10月常務委員会で新しい委員会として承認された。技術向上を目的とした委員会で名称を「技術向上委員会」とし、活動を展開して行くこととなった。

目的

1．安全登山意識レベルの向上、基礎登山技術の習熟、習得に努め事故防止を図る。

2．登山の危険要因を察知できるよう現リーダーのさらなるレベルアップ、次期リーダーの育成、これからを担う若年者のレベルアップを当面の課題として取り組む。

名称：「技術向上委員会」

発足日：平成27年12月1日

支部組織の位置づけ

他委員会と同列に位置し、副支部長山田明美が担当する。

委員会運営

1．委員会メンバー

担当・・・山田明美副支部長

委員長・・片岡泰彦（新）

委員・・・高橋玲司　天野俶明　鈴木慎吾　梶浦昌巳　石田　誠　藤嵜正智　今津英一朗

2．委員会開催日：第4木曜日／月　　19時～

会員の広場

同好会紹介コーナー

東海支部員が有意義なクラブライフを享受するための組織として活動する同好会の活動を紹介するコーナーです。

古道塩の道同好会　　山中　光子

長野県の阿智村。私達にとってはとても充実して探索のできた地区だった。

面白い道があるからこそ、むつかしく何度足を運んだか数えきれない程。おかげで村の人々との交流も深くなった。先回の阿智村浪合地区から少しだけ山あいの古道を楽しみ、「中馬街道」の標識を見て、駒場宿の古い蔵などを見ながら宿場町跡を歩く。近くには長岳寺がある。ここは武田信玄が駒場の山中で亡くなり、この寺に運ばれこっそり火葬された灰塚供養塔もあり、安布知神社奥の山の上には信玄公火葬塚があるとの説もある。

草むらの道にも「中馬街道」と表示され、村全体に東山道、清内路道、中馬街道、下條街道と四つの街道が交差している地区なので、郷土の歴史に力を入れた研究も進んでいる。中馬街道の看板の所在場所の地図があれば良いが、作成されていない。私達が歩いた道の地図を作成すべきと痛感。

阿智村では、3年前に満蒙開拓平和記念館設立。国により極寒の地に赴かされた人々の悲しみ、苦しみをただ見学するだけではなく来館者一人一人にボランティアが丁寧に伝えている。文化面にも、とても力を入れている村。

現在は中馬街道から離れるが、伊那地方一番の馬頭観音が153号線沿いにある。高さ3.2mで1852年建立、街道脇にあったが、洪水で川に流され、地元住民が力を合わせ、川の中から引っ張り上げ、現在地に建立。「伊那一」の称号を得ている。

伊那一の馬頭観音

展望の良い、なめくり坂を登る。ここには現在の豊川市牛久保町から流れた七久里村博徒の伊勢屋親分がわらじを脱いだ、侠客の滑栗初五郎（なめくり）がいた。彼はここを拠点とし清水次郎長と知り合ったとか。なめくり坂を登りきると、今は七久里の広い大きな交差点となっている。

中馬街道の標識

次回は阿智村と別れを告げ、飯田市に入り、七久里の交差点から歩き始める。

会員の広場

リレーエッセイ⑥

マカルー遠征余聞　その１

常任評議員　尾上　昇

このコーナーは、支部員が日頃の思いを自由に投稿する場である。またリレー形式なので一人が連続して投稿するのは原則としてまずいということになろう。とは申せ、我が方もすっかり年を食い昔の記憶が段々と薄れかけてきている。そこで今の内と思いこの場を借りて標記について2, 3回程連載させてもらう我儘をお許し願いたいのである。

本稿は、東海支部が最初にヒマラヤに送ったマカルー隊の余聞である。余聞、すなわち本筋からそれた話、こぼれ話の類である。要は、一隊員の思い出話である。

第１回は、マカルーの登山許可取得にまつわる裏話である。

マカルー登山許可取得騒動

東海支部は、ヒマラヤ登山を計画。ネパール政府と直接交渉して1965年春のローツェ・シャール峰(8, 383m)の登山許可を仮取得。ところが早大も計画していた。早大隊は、日本国内での優先権を得ていた。両者で譲れ譲らぬの大騒動に発展し、最終的に当時のＪＡＣ松方会長にその裁定を委ねた。この時点で軍配の上る先は決まったも同然であった。申すまでもなく早大隊が許可証を握った。この裁定に支部内では憤懣爆発、それを許した支部長以下の幹部の辞任にまでことが及んだ。

こんなさなか、1964年の暮、ネパール政府は、突如ヒマラヤ登山の禁止令を発表した。中印戦争の煽りである。東海支部としては、これで引き下がるわけにはいかぬとカトマンズに人を派遣、次の山の候補としてマカルー峰(8, 463m)の登山許可を申請した。時すでに遅し。禁止令の発表後だったので、申請(ブッキング)を受け付けてくれただけで涙を飲んだ。このブッキングが後々効力を発揮することになるとは、誰も頭になかった。

東海支部は、意気消沈したが、どうしても海外登山を目指す一部の者達の火は消えず、アコンカグア南壁に転進。1966年2月、初登のフレンチルートからの南壁の第2登に成功する。いつかは、ヒマラヤにとその後もヒマラヤ研究会を中心として来るべき日に備えていた。

1968年ネパール政府がヒマラヤ登山を近々解禁すると発表。東海支部では、待ってましたとばかり温めていたマカルー計画が再び動き出した。人を介してネパール政府に問い合わせたところ、かのブッキングは生きていて、解禁になればマカルーの許可は、東海支部に優先的に下りることが確認できた。

そこで東海支部は、1969年のマカルーへの登山隊の派遣を決定した。ところが、ネパール政府は、その後いつからという正式な解禁発表を中々出さなかった。とうとう時間切れで計画を1年延期し、その代り1969年に調査隊の派遣を決める。隊長 松浦正司、隊員 小川 務(現支部長)等の計5名からなる隊である。調査隊の目的は、調査隊の登山許可、本隊の登山許可の取得、マカルー南東稜のルート偵察であった。1969年2月調査隊は、日本を出発。カトマンズ到着と同時にネパール政府登山局と交渉に入る。

この時カトマンズには、他の日本隊、外国の登山隊も訪れていて、目指す山の登山許可取得を交渉するがまだ解禁されていないという理由で門前払いを食いすごすごとカトマンズを去っている。ＪＡＣも解禁近しを知って1970年のエベレスト登山を計画、松方ＪＡＣ会長をカトマンズに送ったが、何の成果も得られていない。

松浦隊長は、それでもマカルーの既得権を盾に粘り強くネパール政府と交渉を続けた。毎日その交渉の様子が電報で報告されてくる。電話は、通信状況が芳しくなく、下手すると半日も電話口の前で待たなければならない。電報が一番確かである。日本側の担当は、原 真さんと尾上である。原さんは、外科医で仕事が忙しい。結局尾上が原病院の地下ルームで張りつきであった。

何度も電報の遣り取りが交わされるが、いつまでたっても埒が明かない。お互いが自然と激しい口調となる。ローマ字で電報を打つのだが、時には「ＢＡＫＡＹＡＲＯＵ　ＳＨＩＮＤＥＭＯ　ＫＹＯＫＡ　ＴＯＲＥ」などの過激な文面なので、当時大津橋にあったＫＤＤ（国際電報・電話局)の局員には、怪訝な顔をされるし、

度々なので呆れ返られた。

ネパール政府との交渉の過程の中で松浦隊長は大変重要なニュースを聞き込んだ。それは、つい最近西独隊にアンナプルナの許可が特別な計らいで与えられたというものである。何が特別だったかを問い質すと、外遊の途次に西独の外相がわざわざカトマンズを訪れ直談判したというのだ。

松浦隊長は、考えた。これと同じ状況を演出すればいいことになる。すなわち日本の外務大臣がカトマンズを訪れ、ネパール政府に申し入れすればよいのである。とはいえ、そんなことは不可能に近い。だとすれば、その替りに外務大臣から駐ネ日本大使に許可取得に動けという指示を出せば同じ効果を発する筈だ。松浦隊長から「外務大臣から駐ネ日本大使に許可申請に動けという指示を出すよう工作せよ。それも至急に」という電報が届いた。

正直これには、原さんも尾上も頭を抱えた。これとて簡単にやれるものではない。南西アジア課の窓口の木っ端役人を訪ねても門前払いを食らうのがおちであろう。その夜いつもの行きつけのクラブで原さんと二人で水割りを飲みながら、思案投首、意気沮喪。暗いムードが漂う。今年は駄目かあ。ふと尾上が一つのアイデアを思い付く。有力な政治家を動かし、外務省を動かすのである。勿論当てがあっての話である。

尾上の大学山岳部の同級生でマカルーの隊員候補になっているKという男がいた。Kは新潟出身である。Kの父君が越山会の幹部であることを思い出した。早速その場からKに電話して田中角栄氏のアポイントメントが取れないかを打診してみた。越山会は、田中角栄氏の強力な後援会で当時の田中角栄氏は、自民党の幹事長でまさに飛ぶ鳥を落とす勢いの政治家であった。周知の通り田中氏は、後日内閣総理大臣に就任する。

Kの父君が直ぐ動いてくれた。3月初旬、東京に大雪が降ってまだ道路に雪が残っている寒い日の払暁、尾上とKが目白の田中邸の前に立った。まだ薄暗い庭先を通り、通された客間には、2，3組の先客がいた。

午前6時30分。廊下をスリッパでバタバタさせながら「今日は寒いなあ」という例の濁声が通った。暫くすると我々の番である。客間へ入ると田中角栄氏が「やあやあKさんの息子さんか。何の用だった」と快活な声がかかる。我々は用向きを一気に喋る。すると少し考えて田中角栄氏は、受話器を取って誰かと我々の話の内容を伝えメモ用紙に何やら知らない人の名前を書いて、今から直ぐ外務省へ行ってこの人に会えというのである。

その足で外務省へ足を運んだ。まだ早かったので小一時間程待たされて通されたのは、実に立派な室であった。そこには、小柄な人物が待っていた。名刺を交換すると外務事務次官牛場信彦とあった。牛場次官からは、事を急ぐのなら電報だし、通常は文書である。どちらが望みなのかという問い掛けがあった。当然事は急ぐので電報でお願いし、併せて念の為文書でもお願いした。田中氏との会見、牛場次官との会見いずれも10分足らずであった。ちなみに牛場氏は、その後は、駐米大使に赴任、日米外交に辣腕を奮う。

1970年2月14日マカルー本隊出発　左より生田. 川口. 越山. 田中. 伊藤. 原. 熊沢. 尾上の各隊員（羽田空港にて記者会見）

正直その時の気持ちは、こんな簡単な事で物事が結着するのかと半信半疑であった。外務省を訪れた翌日、松浦隊長から電報が届いた。内容は、大使館から呼び出しがあり、大使と同道してネパール外務省に赴いたという。直ちに登山局の担当官と詳細打合せの結果、次の様な合意を得た。これも電報での知らせである。

内容は、1969年の調査隊の登山許可を下す。1970年の本隊の許可は、調査隊が帰ってくる迄

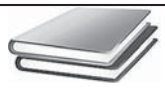
に新しい登山規則が出来るので、それに沿って登山許可を出すというものであった。事実上登山許可が出た事を意味する。松浦隊長と事務局の我々の見事な連繋プレーと言う他はない。松浦隊長は、5月下旬1970年の本隊の登山許可証を携えて所期の目的を果たし無事帰国した。調査隊の登山許可及び翌年本隊の登山許可は、ヒマラヤ解禁後の世界初の正式な登山許可第1号であった。

後日談がある。4月中旬の本部の総会に出席した折のことである。この頃は、総会は、4月の中旬に開催されていた。エベレスト隊の幹部O氏から次のことを告げられた。「東海支部が依頼していた外務省から駐ネ日本大使宛のマカルーの推薦状(文書)は、悪いがヒマラヤ登山許可一国一隊という噂があるので、止めさせてもらった」というのである。本部のエベレスト計画の頓挫を恐れたのであろう。これはまずいぞと一瞬思ったが電報にしてよかったと安堵。一応驚いた顔はしておいたが、お前達の許可は簡単には降りさせないぞとでも言いたげなO氏の得意気な顔は、今も忘れられない。恐らく外務省の窓口でそんな情報を得たのであろう。

ついでに言うと、この問題はエベレスト隊にも最終的に許可が下りたので、ＪＡＣから2隊登山隊が出ることになった。ついでにもう一つ。

登山隊に対する寄付金の免税枠を両隊一本化しようという申し出を本部から受けた。東海支部でも独自に進めていたが、それならということですべてを本部に任せた。ところが、いつまでたっても通知がこない。しびれを切らして問い合わせてみたところ、2つの合同申請は、駄目だと税務当局から指摘があったので、エベレスト隊だけを申請したというのである。呆れて物が言えない。ローツェシャールの許可問題でもそうだし、マカルーの推薦状差し止めしかり、免税措置しかり、どこまで我々を虚仮にする気なのだと怒りは頂点に達した。昔からＪＡＣ本部の我田引水、横車は常套手段であった。

次回は、いよいよキャラバンである。ご期待を。



東海支部の蔵書からの一冊⑥

図書委員長　**石田文男**

『登山技術全書②』

「縦走登山」　　山田哲哉著

《山を歩くのには独特な歩行技術が必要だ。ある程度の荷物を背負い、長時間移動しても疲れにくい歩き方は、経験を積むことによって身につけられる。「ただ歩くだけ」と思っていたら大間違い。よく整備された登山道であっても、じょうずに一定のリズムで歩くのと、不自然な姿勢歩幅もバラバラで歩くのとでは疲労の度合も違う。・・・中略・・・もう一つ大切なことは視線だ。山慣れない人はどうしても足下ばかりに目がいきがちだ。山全て、そのうえで自分の一歩一歩をみて歩く。そんな目配り気配りで山を歩いてみよう》

(P50歩行技術の重要性から抜粋)

「東海支部の蔵書からの一冊」シリーズはその目的が支部の保有する数多の書物から一冊ずつ紹介する事で一人でも多くの会員に読んでもらい、でき得れば活用して貰う事にある。さらには一つでも自らのものとして取り込んで頂ければ幸いである。

次に「ペース配分と休憩」を引いてみる。

《じょうずなペース配分とは、速い遅いの違いはあっても無理の無い、できるだけ同じスピードで歩く事だ。ゆっくりでも一定のリズムにのれるペースであることが大切。一日の歩き出しと行動を終えるときとで、同じペースであることが理想だ。

ペース配分で無視できないのが、じょうずな休憩のとり方だ。僕の場合は歩き出して15分程度で、疲れていなくても１回の休憩をとり、その後は50～60分１回、10分弱の休憩を入れるようにしている。リーダーが心がけることは一日全体の行動のペース配分と、休憩

から休憩のペース配分ができるだけ安定しているようにすることだ。そのためにはできるだけ同じ間隔で休憩が入ることが望ましい。

ただし、実際には危険箇所では休めないし休憩の後がいきなり急登だったりするとペースが掴みにくい。また、強い風雨やひどく寒い日には10分弱の休憩でも身体が冷え、逆につらく感じることもある。こんなときの休憩は短めにして、その分ペースを落として疲労を溜めないようにしてみよう」。

休憩時にする項では「積極的に休む」これが休憩のポイント。ボーとただ腰掛けて、出発間際に〈僕、トイレ･･･〉なんて言うのはダメ。10分弱の休憩の間に乾いた喉を潤し、行動食を食べ、ウエアを調節し･･･と結構忙しい。現在地を地図で確認し、コースの先の様子を自分なりに認識しておくのも大切な仕事。

3分間戦ってダウン寸前のボクサーが、1分間の休憩で蘇えるように整えるのが登山での休憩だ。行動中の服装のままでは身体が冷える原因となる。ザックを降ろしたらサッと一枚アウターなどをはおるのがコツだ。

休憩地点から先のコースの状況によっては、下りが続くようなら靴紐をしっかり締める。膝が弱い人ならサポーターを締め直すこともやっておこう。

ひと昔前までは休憩中も水を飲まない人が多かったが、汗など出た水分は休憩時に補給するのが原則。「喉が乾いた」と感じるのは、すでに軽い脱水状態だと言う。バテの原因にならないためにも意識的に水分補給を行う。

そして、もっと大切なことは、ゆったりと落ち着いて山を眺め、向き合うこと。荒い呼吸で眺めるのとは、違った何かが見えてくるはずだ。そのために山に来たのだから》

先にあげた「歩行技術の重要性」とこの「ペース配分と休憩」も当たり前のことだが、読んでいると「そうだな」と妙に納得させられた気分である。

次に、目次を見てみる。

第1章「用具と服装」（登山靴、ザック、一般登山用具他）
第2章「登山計画と食糧」（登山計画の立て方、自炊山行のメニュー例他）
第3章「歩行技術」（基本の歩き方、道の状況に応じた歩き方他、コラム：ツアー登山/ガイド登山の利点と注意点）
第4章「行動技術」（ペース配分と休憩、パーティと行動、読図とルートファインディング他、コラム：登山技術をどこで学ぶか）
第5章「生活技術」（山小屋に泊まる他、コラム：テント泊縦走と軽量化）
第6章「危険への対処」（行動中に遭う危険、救急処置･救命手当、遭難時の対応と行動、コラム：山岳会のセルフレスキュー対策）。

がある。

《･･･頂上に立ちたいと強く願い、登山道から目指す登山。これがこの本で取上げる縦走登山だ。狭い意味での「縦走」とは、複数の頂上を主に尾根で次々辿っていく登山形態をさす。けれども今多くの人々が登山道をルートとして山頂を目指す登山を、まとめて縦走登山と呼ぶ》は、本書『縦走登山』の冒頭の文である。自然と言う不確定なものによって支配されている登山を行うにためには、山を全体から把握して、地図を読み、天候を見極めそして何より荷物を背負って歩いて頂上を踏むための技術、知識を分かりやすくい解説したいとの思いがこの目次から伝わってくる。

終りに、技術書を読み、山岳書を読み、沢山の山に登る心の中に能動的姿勢があれば、そうした本の中から一つ一つが蓄えられていくものだし、その重みが沁みて感じられるものだ。反対に受動的姿勢には視野が狭いと言える。

総じて、能動的姿勢こそが自らの総合的なレベル・アップに繋がると言える。書物を手にする事が支部の蔵書を活かすことになるのではないか。

因みに、この『登山技術全書』12巻を列挙し、一つでも活かして貰えれば安全登山に繋がるものである。

①『登山入門』、②『縦走登山』、③『雪山登山』、④『沢登り』、⑤『バックカントリースキー＆スノーボード』、⑥『アルパインクライミング』、⑦『フリークライミング』、⑧『山岳地形と読図』、⑨「登山医学入門』、⑩『山岳気象入門』、⑪『セルフレスキュー』、⑫『海外登山』。

2005年～2007年発行　B5版
ページ数136～176頁　　山と渓谷社

支部友コーナー

◆支部友委員会山行計画
（平成28年1月～平成28年4月分）

平成 28 年

1 月 26 日(火)伊勢の朝熊ケ岳(555m)～内宮参拝
☆　　ﾘｰﾀﾞｰ：川北一博　締切：1 月 6 日

2 月 6 日(土)清水の竜爪山(1,041m)
☆☆　　ﾘｰﾀﾞｰ：酒井 広　締切：1 月 17 日

2 月 15 日(月)関ヶ原の伊吹山(1,377m)
☆☆　　雪上歩き
ﾘｰﾀﾞｰ:伊藤康信　締切：1 月 26 日

3 月 4 日 (金) 大日ヶ岳(1,709)・天狗山(1,658)
☆☆真っ白な白山が目の前に(ゴンドラ利用)
ﾘｰﾀﾞｰ：伊藤康信　締切：2 月 12 日

3 月 6 日(日)鈴鹿の御在所岳(1,212m)
☆☆　　ﾘｰﾀﾞｰ：磯部 隆　締切：2 月 14 日

3 月 19 日(土)湖南の鶏冠山 (491m)
☆　　ﾘｰﾀﾞｰ：酒井 広　締切：2 月 27 日

4 月 6 日(水)鯖江の文殊山 (365m)
☆　　ﾘｰﾀﾞｰ：酒井 広　締切：3 月 17 日

4 月 17 日(日)春日井の春日井三山 (429m)
☆　　ﾘｰﾀﾞｰ:川北一博　締切：3 月 29 日

4 月 23 日(土)中山道の山菜採り
☆　　＆野外パーティ
ﾘｰﾀﾞｰ:松本陽子　締切：4 月 2 日

4 月 24 日(日)奥美濃の蕪山 (1,069m)
☆　　ﾘｰﾀﾞｰ：榊 將美　締切：4 月 4 日

4 月 25 日(月)鈴鹿の御在所岳 (1,212m)
☆☆　　アカヤシオを愛でる
ﾘｰﾀﾞｰ：伊藤康信　締切：4 月 5 日

―― *おしらせ* ――

支部友会員数
平成27年10月現在 / 54名

次回支部友ミーティング 開催内容のお知らせ

① 第16回『小説「氷壁」とﾅｲﾛﾝｻﾞｲﾙ事件』
日時：2月10日(水)19:00～　支部ﾙｰﾑ
講師：尾上 昇 氏

②第17回『女性初ﾏﾅｽﾙ登頂ﾄｰｸｼｮｰ』
日時：4月13日(水)19:00～　支部ﾙｰﾑ
講師：中世古直子氏、柴田清康氏

山行対象者 支部友会員及び支部会員

申込み方法
- 支部友会員は申込締切日までに、各山行リーダーが示す方法で申し込む。
- 締切日　原則山行日 20 日前まで。(締切日を過ぎての参加空き情報はﾘｰﾀﾞｰに直接問い合わせ下さい)
- 支部会員は申し込み締切日の翌日以降に、各山行のリーダーへ問い合わせる。
- 山行の募集人員を超えない範囲で、支部会員の参加申し込みを受け付ける。

ﾘｰﾀﾞｰ連絡先
酒井　広　　電話・FAX：0568-92-6137
ﾒｰﾙ：hiroshi19540419@na.commufa.jp
伊藤康信　携帯：090-2577-8137
ﾒｰﾙ：kobitokaba@mediacat.ne.jp
榊　將美　携帯：090-7237-4410
FAX:052-710-7089
ﾒｰﾙ：m.sakaki@minds-consulting.jp
川北一博　携帯：090-3956-4123
ﾒｰﾙ：kawakitakazuhiro@outlook.com
磯部　隆　携帯：090-9180-7245
ﾒｰﾙ：　takass@yk.commufa.jp
松本陽子　携帯：090-7859-4031
ﾒｰﾙ：yo-kom@nifty.com

個人山行もＪＡＣ東海登山届けを！

専用携帯電話(担当 野呂邦彦)
080－2632－3776

Alpine express in the Canadian Rockies
～サウスハウザータワー西壁「It Is What It Is」初登～
30mの大冒険

青年部　山田利行

日本人初上陸？秋のバカブー

忙しかった夏のハイキングガイドを無事に終え、ようやく楽しみにしていた秋のプチバケーションの時期になった。当初は春にやり残したマウントロブソンへのクライミングトリップを考えていたが、天気がまたもや安定せず、久しぶりの長期休暇で空振りは避けたかった。そこで考えたのが、バカブーでミックスクライミングを楽しむことであった。実はこの計画は去年の夏にバカブーに行ったときから考えていたもので、ガイドブックにも秋に登られた数本のミックスラインが記載されていて壁を見る限りでも可能性があるなあと感じていた。そうと決まったら話は早いカナダ人の知り合いから情報を集めて車を走らせたのであった。

歩き始めてからわずか2時間半でケインハットへ到着した。4日分の食料とフルセットのギア、テントなどの幕営具を詰め込んだザックは久々にきつかったが、目の前に広がる氷河とそこからばぁぁんとせり出した岩塔を見ながらのハイキングに足取りは軽かった。夏の時期には予約も困難なケインハットもこの時期は誰もいない。このロケーションで小屋を丸ごと貸し切りにできるなんてカナダに住んでて良かったと思える瞬間であった。お湯で割った焼酎をしばきながらあそこの壁どう

取り付きにて　日の出とテンション最高潮のパートナー

写真　山田トシ

「It Is What It Is」P4 を冒険中のトシ

写真　谷　剛士

？あのラインは？なんて話してとりあえずシーズン初めなので偵察を兼ねてサウスハウザータワー西壁の「The Big Hose」（D+、M5、WI4）というクラシックルートを登ることにした。ウォームアップを終えた私達は取り付きにギアをデポして14時間後に再び小屋へ戻ってきた。事前に調べていた初登の可能性を秘めているラインの状態が良さそうだったので、明日は同じ壁の一番左のガリーシステムを登ることに決めた。

30mの大冒険

翌朝、昨日と同じ取り付きに戻って来た私達は準備を済ませクライミングを開始した。出だしの氷河には登るために空けられたようなトンネルがあって快適な氷河クライミングが楽しめた。2ピッチ目からが壁の始まりである。適度な難しさのミックスとサクサク登れるアイスクライミングを経て核心と思われる4ピッチ目の基部に到着した。傾斜の強いスラブに岩が見える程度に張った氷が私達の前に立ちはだかっている。一途の望みは雪がびっしりついたコーナーにクラックがあるかもしれないという希望であった。他にルートの選択はなく行くか敗退かの二択である。基部で30分は悩んだだろうか。私は登るという決断を下した。プロテクションがまったくとれず、敗退もできなくなる可能性も少なからずあったが安易な敗退はしたくなかった。難しいク

ライミングに限って言えば敗退はいつも簡単な選択だ。適当に言い訳を考えてその冒険を諦めればいいだけだ。

パートナーに「行ってみます」と一言かけてから私の大冒険は始まった。一段上がった所から壁を見上げるとその傾斜に圧倒された。「本当に登れるのか？」「落ちたら少なくとも骨折するぞ」そんな弱気を抑え込んで上へ登れる可能性だけを探る。できる限り腕を伸ばして除雪をすると氷がびっしり詰まったクラックが確認できた。フッキングも効いている。プロテクションも工夫すれば取れるだろうと思った。一呼吸入れて体を上げる。また腕を伸ばして除雪をする。プロテクションが欲しい所ではクラック内の氷をできる限り砕き、ベルグラにスメアリングをしている右足の感覚がなくなりながらも滑るカムを何度もテスティングしてセットした。同じ動作を丁寧に繰り返し、15m登った所で乾いたクラックに1番のキャメロットが決まった時は「ボンバー」と叫んでしまった。そこから先も傾斜が少しは緩んだもののベルグラが一層薄くなり、クラックも途絶えてきた。まだ気を緩めることはできなかったが、完璧に集中しきっていた自分はすっかり恐怖心もなくなり冷静に小ハング下のビレイ点に辿り着くことができた。30mの大冒険を終えた瞬間であった。

さらに2Pを登り、暖かな日の光が当たるサウスハウザータワーの頂上へ立つことができた。そこから見える景色は昨日とはまったく違うものだった。

自分なりの冒険

今回は冒険がテーマなのでそのことについて少し思ってることを書こうと思う。みんな読んでくれてるかわからないけど。前の支部報で書いたように僕はいつも自分なりのチャレンジングな目標を持っていつも山やクライミングに臨みたいと思っている。ストイックな先人たちは初登やそれに準ずることだけが冒険という記事をみたことがあるけど、僕はそうは思わない。誰もやったことのないことを成し遂げることは「人類」という大きな枠での究極の冒険ではあるけれど、自分が初めて行う行為もまた自分自身に対する冒険だと思う。だから僕の中では今回のような初登ラインを登ること、フリークライミングで限界グレードの挑戦、A4やA5なんかのハードエイドクライミング、7,000mや8,000mの高所などあらゆる未知なる行為全てが冒険であると思う。好奇心旺盛な私はその自分自身への未知なる挑戦をクライミングというフィールドで何歳になってもやり続けたいと思っている。

最後に、つい先日「日本山岳会　東海支部ワディントン山群　登山隊　2016」計画が動き出した。この計画は僻地でのクライミング、大きな壁での初登、縦走、氷河上での長期生活経験などいくつもの挑戦をするつもりだ。近い将来、その経験が心の底から納得できるような素晴らしい冒険に繋がるだろう。高橋副支部長を初めとする東海支部の皆様にはいつもお世話になりっぱなしで頭が上がらないが、応援宜しくお願いする次第である。

行動記録

10月14日	12：00	駐車場発
	14：30	ケインハット
10月15日	04：00	ケインハット発
	～スノーパッチ・バカブーコル経由～	
	08：00	壁基部
	14：30	サウスハウザータワー頂上
	16：30	西壁下降～壁基部
	18：45	ケインハット
10月16日	4：45	ケインハット発
	8：00	壁基部
	14：00	サウスハウザータワー頂上
	16：00	壁基部
	18：00	ケインハット
10月17日	11時	下山開始
	12時30分	駐車場

プロフィール

山田利行（通称トシ）

北米での生活とクライミングの両立を目指して2014年に名古屋からカナダ・キャンモアへ移住。ACMG（カナダ山岳会公認）アシスタントハイキングガイド。日本では日本山岳会東海支部、チーム猫屋敷、南山大学アルパインクラブOB会所属。

委員会報告

【登山教室委員会】

現況

前年来続いてきた3箇所4教室が10月より、中日文化センター教室(水)13 名、朝日文化センター(日)19名の2講座になりました。
ＮＨＫ文化センター、中日文化センター山ガール・山ボーイの2講座は応募者不足にてとりあえず明3月まで閉講した。

この機会に当委員会の課題と当面の対策、今後の教室のあり方について検討することにいたしました。

現状認識

① 本年はじめの荒島岳遭難事故に遭遇した 5名のうち 4 名が当登山教室委員会の指導員であったことから、改めて技術力不足と現場判断力の欠如を露呈した。
② いろいろな原因で指導員が減少し、新たに何人かの方々が指導員になった。
③ 新しい指導員も含め、全体で集まる機会が少なく、その出席者もほぼ固定して、委員会全体の意思統一がない。
④ ボランティアとしての要素があり、自主性に依存して、全体的な規律を強く求めなかった。

当面の対策

① 全員出席の委員会を年4回開催し、議論を重ね、理念を共有する。(5, 9, 12, 3月)
支部員全体においても寄せ集め感が否めないが、受講生を預かる登山教室のリーダー、指導員としては安全登山に対する一体感のある理念、思い、熱意が必要であり、それらを共有する機会にする。
②指導員技術研修を実施する。(第1回 11～3月) 基本的な登山技術、的確な判断力を強化するための研修を行い、受講終了者が正指導員となる。
③新たに中日文化センターに土曜日開催の教室を設置するべく働きかける。
④支部が独自に教室を開設する計画には当委員会は関与しない。

(登山教室委員会委員長　天野俶明)

徳本峠越えとウエストン祭

「日本アルプス」の名を広めた、W・ウエストンや、日本山岳会を結成した小島烏水、志賀重昂などの登山家が歩いた古の道、徳本峠越えを楽しみましょう。
今年のウエストン祭は第 70 回となり、記念の催しも企画されています。

日　　時：平成28年6月 3日(金)～6月5日(日)
集合場所：JR春日井駅 AM8:00 (コミューター使用)
行　　程：6/3　木祖村.水木沢天然林トレッキング　3時間
直接 石川旅館へ入る事も可能です。新島々駅より徒歩3分
6/4　徳本峠越え　10時間
6/5　第70回.ウエストン祭&信濃支部主催の午餐会(上高地温泉ホテル)
宿　　泊：6/3 石川旅館(新島々)
6/4 JAC山岳研究所(上高地)
参 加 費：交通費.民宿代 及び 徳本峠越え&ウエストン祭参加費など 約3万円
＊電車又はマイカーの方の交通費は自費となります
定　　員：10名
ポイント：ニリンソウ. サンカヨウ等が咲きほこる 古の街道を昔の人々を偲びながら徳本峠へ。峠からウエストンが涙したという前穂高の雄姿を眺め山研へ… 夜は懇親会。翌日 ウエストン祭参加後、信濃支部及び山岳関係者の方々と午餐会
申込み先：松本　陽子
〒487-0013　春日井市高蔵寺町3-4-8
メール　　yo-kom@nifty.com

先着順、早めの申込みをお願いします。(4月末までに) 尚、参加者が少ない場合は、公共交通機関を利用します。

会　務　報　告

【2015 年 9 月常務委員会】

日時：9 月 24 日（木）19 時 00 分～20 時 45 分

１．審議事項(毛利)

「東海支部Ｅメールによる情報配信について」－配布された資料に基づきデジタルメディア委員会井上委員より仕組み及び運用方法につき説明－メールによる情報発信採用は承認、運用体制など詳細については、少人数のスタッフで検討することとした。

２．委員会報告

①会計(市川)：新入会員（40 歳未満）約 10 名に入会金の補助をした旨報告。

②岳連(市川)：H27 年度の無雪期救助技術講習会の案内が届いている旨報告あるも、受講の為には岳連登録会員となることが必要の為、案内だけに留めることとなった。

③支部友委員会(酒井)：配布された資料をもとに 8，9 月の山行並びに支部友ミーティングの報告があり、10 月に「朝明ミーティング」を行う予定とのこと。支部友会員は現在 51 名。

④猿投の森づくりの会(和田)：配布された資料をもとに報告。会員は 100 名。今年から新しい企画として「わいがや講座」と称し勉強会を行なっていく。ヤマザクラフィールドでの炭作り計画が着々と進んでいる旨の報告があった。

⑤山行委員会(鈴木)：配布された資料に基づき活動の報告。

⑥登山教室委員会(鈴木委員代理)：配布された資料に基に各教室の活動報告。中日及びＮＨＫと山ﾎﾞｰｲ･ｶﾞｰﾙ講座は受講希望者が大幅に減となり休講の可能性が生じている旨報告。この際、支部主催の登山教室も考えていくべきではとの意見もあるとの報告。マイクロバス代の値上げで長距離の山行の見直しが必要となった、4 名の新指導員が加わったなどの報告あり。

⑦亀の会：8 月 9 月の定例山行の実施状況および 10 月の定例山行及び自主山行の計画について報告。

⑧東海ユース(山田)：資料をもとに活動報告。会員は現在 24 名。

⑨青年部(代理で高橋委員)：学生部が今週末にゴザフェスを行う旨報告（東京、大阪からも参加があり親睦をはかる予定とのこと）。支部から３万円助成金。

⑩海外登山(高橋)：学生連盟の登山として南米アコンカグアを予定している。次回に計画書を提示の予定、支部からの支援をよろしくお願いしたい旨依頼。

⑪自然保護委員会(南川)：配布された資料に基づき活動報告。第 19 回森の勉強会が京都で行われること、猿投山周辺の調査活動を 11 月 12 日より毎月第 2 木曜日に行う旨報告があった。

⑬ボランティア委員会(前田)：「親と子のふれあい登山」－10/17 の鈴鹿・尾高山」では親子 50 組 100 名、幼稚園側スタッフ 9～11 名、東海支部スタッフ 13 名が参加予定、10/31 は、親子 46 組 92 名、幼稚園側スタッフ 5～6 名、支部スタッフ 15 名で行う予定である旨報告。11 月 3 日のブラインド山行には山梨支部から見学に 1 名参加予定。六つ星山の会との合同ブラインド登山が 2016 年 2 月 6 日～7 日で、富士見台で行う予定との報告。

⑭写真展実行委員会(井上)：平成 28 年 3 月 15 日～20 日に写真展を行う旨報告と同時に、撮影山行にも参加をお願いしたい旨依頼。

⑮森の音楽祭委員会(毛利)：現在第 1 部が 350 名以上東海学園父母、スタッフを加えると総勢 500 名となる予想である旨報告。

⑯総務委員会(毛利)：配布された本部よりの資料に基づき支部別会員動向」などにつき説明・報告。

出席者：尾上、箕浦、小川、柴田、山田、高橋、和田、星、南川、石田、市川、野呂、酒井、前田、鈴木、中世古、井上、毛利

欠席　：加藤、天野、佐野、藤嵜

【2015 年 10 月常務委員会】

日時：10 月 28 日(水)19 時 00 分～21 時 30 分

１．支部長挨拶(小川委員長)－第 7 回森の音楽祭では、楽団員、アルプホルン奏者を含め総勢 532 人となり、盛況のうちに終わりました。皆さんのご協力を感謝します。

２．佐野副支部長－10 月 17 日～25 日に行ったインドネシアのスメル山の報告。

３．審議事項(毛利)

①新委員会の発足：「仮称：技術向上指導委員会」について（小川支部長）－支部報掲載の「荒島岳遭難事故報告」をうけ、支部として次の 3 点、ⅰ．レスキュー、ⅱ．岩登り、ⅲ雪山技術習得の取組みを速やかに実行に移したい。委員長に片岡氏を、担当を山田副支部長にお願いし山行リーダーの技術向上を目的とし 12 月 1 日発

足を提案－新委員会の発足は承認された。
②2016 東海学生山岳連盟アコンカグア登山計画について（小澤佑介他 3 名の学生）：配布された資料に基づき計画の説明と同時に東海支部のチャレンジ基金の申請あり。－承認。
③日本山岳会東海支部ワディントン山群登山隊 2016 について（菊池　徳会員）：配布された資料に基づき計画の概要説明と同時に海外登山基金の申請を考えている旨報告-110 周年記念事業としての申請をしてはどうかとの意見もあったが-申請の締め切り過ぎている可能性あるので、調査必要（その後チェックの結果、申請期限過ぎているので 110 周年記念事業での申請は不可であること判明）。東海支部のチャレンジ基金申請については承認された。
④指導員研修山行（山田副支部長）：いくつかの登山教室が休講になったことから、登山教室委員会の指導員希望者を対象に 3 月まで月に 1～2 回のペースでレベルアップトレーニングをスタートする予定である旨報告。
４．委員会報告
①会計（市川）：森の音楽祭に 16 万円助成金の振込、40 歳未満新入会員 12 名に入会金の補助をした旨報告。
②岳連（市川）：理事会で、東京オリンピックの追加種目にスポーツクライミングが挙がっていることに危惧をいだいているとの議論があった旨報告。
③支部友委員会（酒井）：配布された資料をもとに活動報告、会員数-現在 54 名。
④山行委員会（鈴木）：配布された資料を基づき山行状況などにつき報告。また、「自己研鑽山行」を来年から実施予定である旨報告。
⑤亀の会委員会（加藤）：配布された資料に基づき事業報告。「荒島岳遭難事故からの教訓」の文書をまとめた旨報告。日ごろの技術訓練について、レスキュー講習会などの受講に心がけ、現地でもやるようにする旨報告。
⑥猿投の森づくり委員会（和田）：配布された資料に基づき活動報告。12 月 19 日に仕事納めを《やまじ小舎》で行うので参加を歓迎との事。
⑦東海ユース（山田）：配布された資料をもとに活動報告。
⑧支部報編集委員会（星）：配布資料に基づき第 144 号の内容説明。新企画として「東海岳人列伝」をスタート。
⑨青年部（藤嵜）：配布された資料をもとに、山行報告・山行予定につき説明。
⑩登山教室委員会（天野）：配布された資料をもとに活動報告。先に審議事項にあった「指導員研修山行」を実施予定である旨報告。
⑪自然保護委員会（山田副支部長代理）：配布された資料をもとに猿投山周辺地域をベースにした調査活動の取組計画を報告。
⑫ボランティア委員会（前田）：親子ふれあい登山第 1 回は 10 月 17 日に終了、第 2 回は 10 月 31 日に予定、。ブラインド山行を 11 月 3 日に実施予定である旨報告。
⑬インド・ヒマラヤ出版委員会（星）：出版・編集状況の説明、11 月の常務委員会には具体的内容を提示したい旨説明。
⑭写真展実行委員会（井上）：配布された資料に基づき作品の募集状況、パネル作業業者の決定、撮影山行の開催予定など報告。
⑯森の音楽祭委員会（毛利）：総勢 532 名、有料参加者 380 名のうち第 2 部のハイキング 77 名、観察会 135 名、リース 47 名の参加を得た旨報告。
⑮総務委員会（毛利）：
＊第 4 回夏山フェスタが 2016. 6/11～6/12 に開催。中部経済新聞社より協力依頼が入っている旨報告。
＊東海支部委員会委員忘年会を 12 月 24 日（木）常務委員会後の 19：30～ルームにて行うので、各委員会ごとにまとめて参加者氏名を通知してほしい旨依頼。
出席者：箕浦、小川、柴田、山田、高橋、和田、星、石田、市川、野呂、酒井、前田、加藤、天野、佐野、藤嵜、鈴木、中世古、井上、毛利
欠席　：尾上、南川、

総務委員会　毛利邦男　記

ルー ム 日 誌

―・― 9月 ―・―・―・―・―・―

１日（火）県岳連
２日（水）青年部／ＴＮＣＣ（同好会）
３日（木）写真展委員会
４日（金）古道塩の道
７日（月）支部友委員会
１０日（木）自然保護委員会
１４日（月）登山教室委員会
１５日（火）猿投の森運営委員会／ボランティア委員会
１６日（水）山行委員会／総務委員会
１７日（木）東海学生山岳連盟／インドヒマラヤ編集会議

２１日（土）東海ユース
２４日（木）常務委員会
２８日（月）図書委員会／支部報編集会議
２９日（火）登山教室委員会
３０日（水）支部友会新入会員オリエンテーション

１０月

１日（木）写真展委員会
２日（金）古道塩の道／森の音楽祭
３日（土）インドヒマラヤ編集会議
４日（日）東海ユース（企画）
５日（月）支部友委員会
６日（火）県岳連／支部報発送作業
７日（水）青年部／ＴＮＣＣ（同好会）
８日（木）自然保護委員会
１０日（土）インドヒマラヤ編集会議
１３日（月）登山教室委員会
１４日（水）支部友ミーティング
１５日（木）東海学生山岳連盟
１６日（金）森の音楽祭
１９日（月）図書委員会
２０日（火）ボランティア委員会
２１日（水）山行委員会／総務委員会
２３日（金）亀の会運営会議
２７日（火）猿投の森運営委員会
２８日（水）常務委員会

１１月

２日（月）支部友委員会
４日（水）青年部／ＴＮＣＣ（同好会）
５日（木）写真展委員会
６日（金）古道塩の道
９日（月）登山教室委員会
１０日（火）県岳連
１２日（木）自然保護委員会
１３日（金）森の音楽祭
１６日（月）図書委員会
１７日（火）ボランティア委員会
１８日（水）山行委員会／総務委員会
１９日（木）東海学生山岳連盟
２４日（火）猿投の森運営委員会
２５日（水）常務委員会

会員異動

入会：小澤大輔(15810)　田島　章(15813)
勝又佑記(15818)　谷口直子(15836)
佐藤愛子(15842)　吉永愛人(15844)
吉川あすか(15845)　菊池　徳(15852)
国枝宗央(15863)　長谷川徹(15864)
復活：安藤忠夫(7333)　片岡泰彦(8866)
退会：なし

オープン講演会のご案内

語り部が語る「小説氷壁とナイロンザイル事件」

日時　平成 28 年 2 月 10 日（火）19：00～20：30
会場　東海支部ルーム
語部　尾上　昇 氏（東海支部常任評議員）
内容　昭和 30 年 1 月 2 日、麻より 3 倍強いと喧伝されていたナイロンザイルを持参して前穂東壁の厳冬期初登攀を目指していたパーティの一人が滑落、いとも簡単にナイロンザイルが切れた。何故そんなに簡単に切れたのか･･･。
実弟の滑落死に疑問を持った石岡繁男氏(東海支部創設者)の闘いが始まる。この事件に興味を持った作家の井上 靖が朝日新聞の連載小説「氷壁」と題して執筆。ナイロンザイル事件に題材を取っているが、そこは小説、恋あり、不倫あり勿論ナイロンザイルの切断事故に葛藤する主人公、さらには、恋人を取るか人妻のもとに走るのか、そして･･･。

◎この講演会は、支部友ミーティングですが、今回は、オープン講演会としました。
支部関係者の皆様、是非ご参加下さい。
◎小説「氷壁」井上 靖著、発行　新潮社、初版 s 38.11
BookOff 等で入手して、正月休みを利用して、是非読んで下さい。
◎語り部張り切っています。

INFORMATION

【総務委員会からのお知らせ】

△東海支部新年懇親会のご案内△

日　時　平成28年1月16日（土）受付16時～
講演及び新年懇親会17時00分～20時（予定）
場　所　高砂殿（The Grand Tiara）4階
　名古屋市中区富士見町10-27
　東海支部ルーム南隣　TEL 052(323)1122
内　容
第1部　挨拶と講演
4階「鳳凰」17時00分～18時20分
・支部長挨拶
・講演　飯田　肇
　　（立山カルデラ砂防博物館課長）

飯田氏は雪氷学の権威で2012年に日本初の現存する氷河を確認されたことで知られ、2005年と2013年には秩父宮記念山岳賞を受賞されています。演題は、「立山剣岳における現存氷河ならびに他の現存氷河の可能性」の予定です。

・「インドヒマラヤ」上梓　挨拶　沖委員長
・壮行会
　①ワディングトン山群登山隊
　②アコンカグア登山隊
第2部　懇親会　18時30分～20時00分
・懇親会費　6000円（予定）
出欠の返事が未だの方は、至急ご連絡下さい。

総務委員長　毛利　邦男

【写真展実行委員会からのお知らせ】

新年を迎え　新春のお慶びを申し上げます。雪山の静けさの中で、各地の撮影を開催します。ご一緒に撮影しませんか。撮影せず、冬山を楽しみたい方も歓迎します。是非ご参加ください。お待ちしています。

①　美ヶ原
・月日：2月19日(金)～20日(土)　1泊2日
・宿泊：王ヶ頭ホテル
・交通手段：公共交通機関
・撮影対象：雪の王ヶ頭等
・服装・装備：冬山の防寒対策の服装
・申込締切：1月末(定員に達しました)
・申込先　：坂本孝(写真展実行委員)　携帯090-2946-9555及び委員会メンバー

②　西穂高岳
・月日：4月24日(日)～25日（月)1泊2日
・撮影対象：雪の穂高連峰
　詳細は支部報4月号に掲載します。

③ 馬場島「剱の大王杉」他
・月日：5月中旬
・撮影対象：剱の大王杉、中山から見る剱岳
　詳細は支部報4月号に掲載します。

写真展実行委員会　井上寛之

【写真展実行委員会からのお知らせ】

第15回東海岳人写真展作品募集のお知らせ

支部報前号でもお知らせしましたが、第15回東海岳人写真展に展示する作品募集中です。

日ごろの山岳会会員として登山の中で出会った美しい景色や感動した瞬間を写し撮った作品を奮ってご応募ください。

今まで写真展に出展したことのない方、高級なカメラで撮影した写真でなくデジカメで撮影した写真でも、鑑賞に堪える立派な作品になります。自信のない方には、写真展実行委員がお手伝いします。

1.期日　平成28年2月15日(火)～20日(日)
2.会場　名古屋市中区　市民ギャラリー栄
3.出品費用　13,000円
4.募集期間　11月15日(日)～1月15日(金)
5.募集詳細　「募集のお知らせ」、「応募申込書」が支部報10月号に同封されています。

また、東海支部のホームページからのダウンロードも出来ます。(メニューの「写真展実行委員会」をクリックしてください。)

6.問合せ　下記の写真展実行委員までお問い合わせください。
7.写真展実行委員
　委員長　井上寛之
　副委員長　今田英司
　委員　岡本英俊　葛谷凱治　坂本孝
　　杉浦吉治　椿利枝子　中野八千代
　　樋口悦子　増田千恵子　箕浦靖夫
　　山内薫

編集後記

あけましておめでとうございます。新年号は遠征計画など内容も豊富になり、ページ数も過去最高となりました。今年も皆様の活発な活動を期待しています。　星　一男

海外トレッキングのパイオニア！

世界の山旅を手がけて46年

アルパインツアーサービス株式会社

“山仲間でオリジナルツアーを企画しませんか？”
説明会にお伺いします。お気軽にご相談下さい

名古屋 〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-23-2（第3千福ビル3階） 052-581-3211

アルパインツアー 検索

www.alpine-tour.com

ATLAS TREK

ハイキングから本格的な高峰登山までお気軽にお問い合わせ下さい。
観光庁長官登録旅行業第 1167 号 /（社）日本旅行業協会正会員

株式会社アトラストレック

名古屋サービスデスク TEL：052-788-2422
（東京本社転送電話）

【東京本社】〒180-0008 東京都新宿区三栄町 25 番地　三栄ハウス 202
TEL：03-3341-0030 FAX：03-3341-9200 E-Mail：info@atlastrek.co.jp
ホームページ　http://www.atlastrek.co.jp/

SINCE 1975
mont-bell

ウエア・ギアに
遊び心もそろえて
お待ちしています！

アウトドア用品は、
機能的なアイテムが豊富にそろう
「モンベルストア」へ。

名古屋店 Outlet	愛知県名古屋市中区栄3-18-1 ナディアパークロフト 6階
長久手店 Outlet	愛知県長久手市片平1-901
名古屋みなと店 Outlet	愛知県名古屋市港区品川町2-1-6 イオンモール名古屋みなと 3階
各務原店	岐阜県各務原市那加萱場町3-8 イオンモール各務原 2階
長島店 Outlet	三重県桑名市長島町浦安368 三井アウトレットパークジャズドリーム長島 2階
鈴鹿店	三重県鈴鹿市庄野羽山4-1-2 イオンモール鈴鹿 1階
新静岡店	静岡県静岡市葵区鷹匠1丁目1-1 新静岡セノバ 4階

Outlet アイコンのある店舗では、ファクトリーアウトレット商品も取り扱っています。

モンベル・カスタマー・サービス
0088-22-0031/TEL.06-6536-5740　www.montbell.jp
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

企 画・デザイン・印 刷

株式会社 ASAI 隆文社

株式会社　浅 井 隆 文 社

〒453-0801 名古屋市中村区太閤四丁目8番3号
TEL (052) 451-6656　FAX (052) 451-6657
E-mail : ta@asai-rbs.co.jp

♣♣♣♣♣♣♣ OMC ♣♣♣♣♣♣♣

住いのコンサルタント

㈲ 富 士 見 企 画

〒460－0014
名古屋市中区富士見町８番８号

♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣♣

建設業許可を取りたい、日本国籍を取得したい（帰化）、遺言を公正証書で作成したい、戸籍謄本や除籍謄本を代行取得して欲しい、任意成年後見の相談をしたい、会計記帳を頼みたい等々

ご相談は行政書士の西山秀夫へ

〒460-0002名古屋市中区丸の内3丁目21番21号
（地下鉄・久屋大通駅から2分の）丸の内東桜ビル1004号室
TEL：090-4857-9130
URL：http://www.nygs-office.com/

㈱ワークシステムサービス

一般社団法人　日本自動車運行管理協会
一般社団法人　中部地区自動車管理業協会

・一般貸切旅客事業　・車両運行管理事業
・愛知県知事登録旅行業　・労働者派遣業
・ビル清掃管理事業　・介護支援事業

〒465-0021　名古屋市名東区猪子石３丁目113番地
TEL 052 (779) 8777㈹　FAX 052 (779) 0031
http://www.work-system.co.jp/